連載 関係からみた子どものこころと育ち

第15回

自閉症に対する短期入院による母子関係修復の試み（その1）

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授，くじらホスピタル

複雑な家族背景の中で育った自閉症児

O男：初診時3歳6カ月。

家族構成および家族背景：父親は祖父の家業を継ぎ，母親もそれを手伝っているため，毎日多忙な生活を送っている。O男は一人っ子で，父方祖父母，および曾祖母と同居している。結婚当時，曾祖母は認知症で寝たきりだったため，結婚するとすぐに曾祖母の介護も引き受けなくてはならなかった。家業はいまだ祖父が実質的に実権を握っているため，父親の発言権は弱く，肩身の狭い状態にあった。

5年前，両親は結婚したが，父親は家業を思うようにこなすこともできず，結婚前から体調を悪くし，仕事への意欲を失いつつあった。結婚後，まもなく母親はO男を出産したが，出産直後の1週間ほど気分が落ち込み，マタニティ・ブルーの状態になった。しかし，すぐに回復し，家業も手伝うようになった。父親は家業も育児も十分には取り組めない状態であったため，母親は父親を頼ることもできず，内心腹立たしい思いを抱きながら黙々と頑張っていた。

O男が1歳半から2歳ころ，家業を十分に切り盛りすることができない父親はプレッシャーに押しつぶされ，ますます元気がなくなっていった。近くの医院でうつ病と診断されて，治療を受けることになった。父親の気持ちは荒れて，家の器物を破壊するほどになった。カーッとなるとすぐにかんしゃくを起こすことも少なくなかった。

父親と祖母との間では，家業のことで口げんかが絶えなかった。祖父は両者の間に入ることもなく，我関せずの態度をとっていた。そうした雰囲気の家庭内で，母親はじっと耐えながら，一人で育児と介護に精を出していた。

家業の工場と自宅は棟続きで，社員と客の出入りが多く，結婚当初，両親とO男3人家族のプライベート・スペースはないも同然であった。そのため，スープの冷めない距離にマンションを借りて住むようになった。しかし，父親は仕事の意欲を失うとともに，育児にも消極的で，家族のいるマンションにはほとんど帰らず，工場と棟続きの家に引きこもっている状態がしばらく続いた。O男が生まれてから，夜マンションに帰ったのは，この3年間でもわずか5回程度だったという。

生育歴：周産期にとくに異常はなく，満期正常分娩。乳児期は一人遊びが多く，手のかからないおとなしい子どもであった。ことばをまったくしゃべらず，母親にもなつかない。誰が相手をしていても平気だった。1歳半時，名前を呼んでも振り向かないため，曾祖母の介護に追われていた母親もしだいに気になり，耳鼻科を受診した。聴力検査で異常はなかったので，それ以上どこかに相談に行くことはしなかった。母親はO男を背負いながら曾祖母の介護を続けていた。当時を振り返ると，曾祖母の下の世話をしていたことだけが母親の脳裏に浮かぶという。1年半ほど経って曾祖母が入院することになり，母親は結婚後，初めて介護から解放された。

母親もようやく子どものことに気持ちが向き始めると，いよいよO男の行動一つひとつが気になり始めた。2歳半時，こども病院神経科を受診し，そこで自閉症と診断された。以来，2週間に1回の割合で言語治療を受け始め，1年が経過した。しかし，さほどの改善はみられない。子どもが自閉症と診断されてから父親の気分はさらに落ち込み，塞ぎ込むようになった。母親としては今後どうしたらよいかお先真っ暗な心境になった。そんなときに母方祖母が筆者の書籍を読んだことがきっかけで，当院を受診することになった。

初診時の印象的なエピソード

初回の面接で，これまでの経過について母親に詳しく聞いた。O男も一緒にいたが，診察室内でうろうろと動き回っていた。その間，母方祖母は待合室で座って待っていた。話の途中から，O男は診察室のドアを半開きにして，壁とドアに挟まれるようにして，身体半分を診察室の中に入れ，後の半分を外に出して，ドアに挟まれたような状態で動こうとしなくなった。診察室の外には祖母が，中には母親がいたが，O男は両者の間でどちらに行こうか迷っているように見えた。

母親に対する強いアンビバレンス

O男が母親と祖母両者に対して，どっちつかずの状態にあることが明確に見てとれる行動であるが，これこそまさにアンビバレンスそのものを示すものである。診察室でO男は母親とずっと一緒にいたが，母親に接近して甘えることはまったくなかった。しかし，しばらくして祖母が入室してくると，母親を避けて祖母のほうに近寄り，祖母に向かって〈ママ〉と呼んで近づき，抱っこをせがむのだった。O男の行動には，母親に対するアンビバレンスのみならず，母親に対するあてつけではないかとさえ思える感じを受けた。ここで筆者は母親の心情を察しながら，O男が母親を避けるのは，嫌いだからではなく，母親に対する思いが強いからであること，それが強ければ強いほどよけいに避けることを述べ，このような矛盾した行動をとるのは，O男のアンビバレンスという心理によっていることをわかりやすく説明した。

●O男の行動特徴

母親の話を総合すると，以下の特徴を列挙することができた。

①他者に対して回避的傾向が強く，自閉的対人行動を認める。

②突然，パニックやかんしゃくを起こすことがあるが，母親にはその要因がわからない。

③好きなことが限定的である。たとえば，母親に踏切を描くようにねだる，保育園に行く通り道に赤と黒の線路の踏切があるが，それを触りたがって，やめさせるのに大変である。

④ぴょんぴょんと飛び跳ね，椅子を回転して楽しむなどの常同行動が多い。

⑤母親の手を引っ張って要求するというクレーン現象を認める。

複雑な養育環境の影響も考慮に入れる

以上の特徴から，症候学的には典型的な自閉症であると考えられた。しかし，これまでの養育環境を考えると，父親の病気や，母親が曾祖母の介護に忙殺されてきたこと，家業の商売で家族全員慌ただしい毎日で，これまでほとんどO男への関心や世話が注がれていなかったことなどから，O男の現在の病態の成り立ちには，養育環境もかなり影響していることが予想された。そのため，環境調整を考慮しながら母子関係の修復をはかれば，かなりの改善が期待できるのではと筆者は予測した。その感を強くしたのは，母親がこれまでの養育を強く反省し，これから真剣に取り組む決意を述べるとともに，子どもがこのようになった一つの要因として，家庭の慌ただしさも手伝っているのではないかとひそかに感じていたためでもあった。これまでの生活状況を聞くと，筆者は，母親がよくこれまで頑張ってこられたものだと心底思わずにはいられなかった。

●第2回：新奇場面法（SSP）実施

2回目から診察室ではなく，遊戯室を使用することにした。診察室の4倍強もある広い部屋で，窓際には整然とさまざまな遊具が置かれ，入口付近の反対側の壁には箱庭療法用のミニチュア玩具がたくさん並べられていた。ただ，すぐには目につかないように，カーテンで覆われていた。

初診時は祖母が同伴していたが，今回は母子二人であった。後で聞くと，受診前日まで祖母が一緒に来てくれることになっていたが，前回の筆者の話を聞いたとき，母親は自分がこの子としっかり向き合うことが大切だと痛感したということで，今日は一人でこの子を連れてくることを決心したという。通院には片道2時間は優にかかるが，母子二人で道中を大切にしたいとの思いが強く，決意したと述べた。

遊戯室に母子を案内すると，最初の5分程度は自由に遊んでもらった。O男は壁際に置かれたミニチュアの乗り物を目ざとく見つけて扱い始めた。母親と一緒にそれを手にし，母親はプラレールを作り始めた。母親が手慣れた調子で熱心に取り組んでいるのが，印象的だった。O男は母親のそばにいるが，母親に対して何かしてほしいという要求は見せなかった。

しばらくして簡便なかたちでSSPを実施することにした。母親に部屋から出て行ってもらうことで，母子の分離と再会時のO

男の反応を見るためであった。

母親の退室を敏感に察知する

母親には3分したら戻ってくるようにと伝え，筆者の合図で出て行ってもらうことにしたが，そろそろ合図を送ろうと思った矢先に，O男が母親の膝の上にさりげなく近寄って座り，母親の身体に手を回したため，筆者は合図を送るタイミングを逸した。何をするかを母親にO男の前で説明していたので，O男はそれを聞いて，さりげなく母親が退室するのを止めているかのように思われるほどであった。そのため，筆者はしばらくO男の様子を見ることにし，O男が少し母親から離れたのを見計らって，母親に退室するよう合図を送った。

そのときO男は，母親が退室するのを見ることも，目で追うこともせず，まるで母親の退室に気づいていないかのように振る舞った。しかし，まったく声を出すことはなく，ミニカーを手離さずにずっと持っていた。何かの遊びに熱中している様子はなく，壁の近くにいることが多かった。筆者は部屋のコーナーに一人でいたが，こちらに近づくこともなかった。なんともいえない緊張した空気に包まれた。

この3分間，母親は退室して一人でドアの入り口付近で待機していたが，その間どんな気持ちであったかを後で尋ねた。O男は自分が退室してもとくに気にすることはなく，いつもどおり一人で遊んでいたのではないかと思っていたという。筆者は，O男を一人でのこし，母親自身どんな思いだったかを尋ねたつもりであったので，あらためてそのことを尋ねると，自分を追いかけてこないことに気づいていたし，自分が外に出ることもこの子はわかっていたと思うと話すだけで，自分の感情は表出しなかった。O男と離れて母親も少し寂しい思いをしたのではないかと推測したが，母親はそのことを直接口にすることはなく，それよりもむしろO男が筆者に対して無視するような失礼な態度をとったのではないか気遣っていた。この言葉から，おそらくは母親自身もO男に対して，否定的な思いを少なからず抱いていたことが推測されるのだった。

周囲への強い警戒心と溜め息にみられる安堵感

この3分間，O男はまったく声を出さず，少しだけ動き回っていたが，母親が戻ってきてもとくに目立った反応を見せず，それまでどおりにしていた。しかし，少し時間が経つと，母親のほうに徐々に寄って行き，座っている母親のそばに近づくと，視線はほかのほうに向けながらも，手だけを伸ばして母親の身体に触れ始めた。そして，さりげなく母親の膝の上に座った。その動きを見ていると，O男はまるで相手に自分の意図を察せられるのが怖くてそうしているように思われた。さらに筆者がいたく驚かされたのは次の行動であった。O男は母親の膝の上に乗ったかと思うと，フーッと深い溜め息をついたのである。この間，O男は周囲の人たちの様子をうかがい，警戒心を抱きながらも，なんとか母親のそばに行きたかったのであろう。目的を達成したことで，それまでの張りつめていた緊張がやっと溶けたのか，彼の溜め息にはそのような彼のこころの動きが端的に表れているように思われた。さっそくこのことを母親と話し合ったところ，母親もすぐに気づいたという。O男が母親の不在の間，いかに心細い思いをしていたかを，このとき母親は初めて実感することができたのである。

活発に動き始める

母親と筆者がO男のそうした気持ちを取り上げて話し合ったことが，遊戯室の場の雰囲気を和ませたのであろう。その後，O男の動きはしだいに活発になり，箱庭療法に使うミニチュアを覆っているカーテンを自分で開けて，次々に物色し始めた。最初はこちらの目を気にして遠慮していたが，しだいに興味をもち始めたらしく，筆者と話し合っていた母親の手を引いて自分のほうに引き寄せた。さらには自分の欲しいものを母親に取ってもらいたそうにして，〈ママ！〉と小声ながらも力のこもった声を出すまでになった。

わずか30分ほどしか経過していなかったが，O男の変化は驚くほどであった。母親にもそのことを取り上げ，二人して喜び合った。

母親への説明と助言

このセッションでは，強迫的なこだわりはほとんど認められなかったが，母親に対する回避的行動が目立っていた。もっとも特徴的であったのは，このようなO男の回避的行動の背後に，彼の強いアンビバレンスを見てとることができた。

これまで母親は，家庭の複雑な事情からいつも張りつめた気持ちを抱き続けていたであろうことは容易に想像できたが，そのこ

とが母親に対して容易に近づけないアンビバレンスを引き起こし，O男は気遣いと回避的傾向を強めていったのではないかと，母親に説明した。母親は静かに肯定的に受け止めながら話を聞いていた。

●これまでの育児を振り返って

初回時に渡した日記帳に，母親はこれまでの育児を振り返って以下のように記していた。

> O男を保育園に送り出してから，これまでの育児を回想してみると，O男が1歳から2歳までの間はただただ嫁として家になじむことで一生懸命だったので，正直なところ，わが子を見て愛しいと思ったことはなかったように思います。当時，子どもの生えた歯の本数より，介護していた夫の祖母の残っている歯の本数を数えた記憶があります。家業の工場で周囲から認められたい一心で，目いっぱい働いている間，O男はほとんどテレビ三昧で，母子で向き合ったという記憶はほとんどありません。ようやく最近，母親として向き合おうとしていますが，O男の行動の意図がつかみにくく，空回りしてしまいます。

●第3回

母子と筆者の三人で過ごしたが，三人で一緒に遊ぶような雰囲気は生まれず，O男一人で周囲に置かれた玩具を手探りするように一つひとつ扱い始めるが，興味をそそるものがないのか，それとも遊びそのものに気が乗らないのか，ついにはボールテントの中に一人で入っていった。そのとき，前回と同じミニチュアをお守りのようにして大事に握っていた。母親も相手をしようと，テントの中に入ったが，O男は母親に背を向けるようにしてごろごろと横になり，さも退屈そうにしていた。どこか母親に対して無視するような態度をとっているように見えた。

思うように甘えられずに「拗ねている」

その後，O男はプラレールをつなげようとし始めた。しかし，気乗りしないのか，仕方なく扱っているように見えた。うまくつなぐことができず，〈ママ！〉と手伝いを要求するが，筆者にも同じように要求していたところを見ると，このときの〈ママ〉はとくに母親でなければならないという切実な思いは感じられなかった。母親につないでもらったプラレールに電車を走らせながら，横になって斜め越しに電車を眺めていたが，母親に背を向けていた。そんなO男の姿を見ていると，「拗ねている」感じを強く抱いた。O男は母親に背を向けていることが多く，たとえ母親に近づくとしても，さりげなく悟られないようにして近づいていた。

母親にはそのことを取り上げ，遊びに熱中できる状態ではなく，気もそぞろで，母親に甘えたくてもストレートに甘えられず，「拗ねている」状態でしょうと説明した。母親はどうしてよいやら戸惑い，かなり緊張していたというが，それはO男の前だけでなく，日常生活の中でいつも同じような思いであることを述べ，そのことがO男にも緊張を強いてしまったであろうことに気づき始めていた。

母親への助言

今回のセッションで，母親は緊張しながらもなんとか相手をしようと懸命に努力している様子だった。O男がなにかしていると，こうしたほうがよいのではと，つい口を挟んでしまっていた。そのことを取り上げ，しばらくはO男の動きを見守っているだけでよいので，肩の力を抜きましょう，焦らずゆっくり時間をかけていけば大丈夫です，子どもは母親のことを強く思っていますから，と助言した。

●日記にみられる母親の気づき

> 今日，主人と義母が軽い言い争いをしていたとき，けんかの仲裁には入らず，ただ自分の仕事をしながら，耳をダンボのようにして聞き耳を立てていた。そのとき，ふとO男もいつもこんなふうに平静を装って親たちの会話を聞いているのかと思った。
>
> 夜，お風呂に入るとき“本を持って入る！”と言って聞かず，少し大きい声で「本が駄目になっちゃうでしょ。持っては入れないのよ！」と言うと，ママの目を見て耳を塞いでいた。私の言葉の内容というより，声のボリュームに敏感に反応している様子で，忍耐強く説明してやらねばと反省した。

母親はO男が言葉そのものよりもその語調に強く反応していることに気づいているが，このような気づきは母子の気持ちが影響し合っていることを肌で感じていることを示している。非常によい徴候であると思われ，母親にはそのことを肯定的に伝えた。

●第4回

開始から40分間はO男一人で玩具のほうを向き，手当たりしだいにいろいろな玩具を手にして細かく観察している様子だった。しかし，表情を見ると，難しい顔をしていて，遊びを楽しんでいるようには見えず，ことさら母親に対して背を向けているのが気になった。

そこで筆者は母親に，O男と母親との間に少し距離がありすぎるので，O男の手が届く程度まで移動するように指示し，O男がさりげなく接近したら，膝の上にでも乗せてやるようにと助言した。その際，母親にもリラックスしてもらおうと，母親の背にクッションを置くことで，寝転がってもよいように手助けをした。まだ母子ともぎこちない動きではあったが，少しずつO男は母親にもたれるようになった。それ以前にも，O男は玩具を手に取りたそうにして，母親の手を引いて取ってくれと要求していた。母親は熱心に対応していたが，そのあまりに熱心な動きとはたらきかけに，O男のさりげない動きと波長が合わず，O男の接近に対してタイミングを逸することが少なくなかった。O男がさりげない仕草で要求することが幾度か認められたが，母親は玩具を使ってどう遊ばせたらよいかに心を砕きすぎるためか，O男のしぐさに気づかないこともあった。

母子の気持ちが通い合い始める

この2週間の日記には，O男の気持ちをしだいに感じ取れるようになったことがうかがわれ，それとともに母子双方で気持ちが通い始めていることがわかる。

●母親の日記

ママの姿をいつも探している様子で，朝もママが先にベッドから抜けると，最近は30分以内にO男もリビングに出てくる。リビング内のソファでごろごろしているが，朝のママの生活の音を聞きながら，また二度寝する。いつもママの存在を気にして敏感に後を追ってくる。以前よりも物理的な距離が近づいていると思う。

この数日，O男が抱っこをせがんだときに，抱き上げ抱き締めることに気持ちが入っている気がする。「ママに抱っこされたい」というわが子の気持ちを受け止めながら抱っこしているという実感がある。

短期入院による母子関係修復プログラムの提案

O男の動きを見ていると，明らかに母親への「甘え」を感じさせる行動が増えて，わかりやすくなっていった。母親の肩の力が抜けて，多少なりとも心のゆとりが生まれたならば，O男も近づきやすくなり，二人の関係はもっと深まっていくことが期待された。

そこで筆者は，2泊3日の短期入院での母子関係修復プログラムを提案したところ，母親は強く希望したため，実施することになった。

次回はこのプログラムの内容とそこでの変化，そしてその後の経過について述べる。